

新春文芸

川柳

麻井 文博 **選**

兼題「スタート」

一席 少年の夢が膨らむ始発駅

二席 和解への一步握手をしてみよう

三席 風船を飛ばし出発点にする

人生にはスタートラインが何度もある。生命の誕生、進学、社会への旅立ち、定年後の再スタートなど、寄せられた作品に目を通してながらさまざまな「スタート」の場面に合わせてもらった。今回最も多かったのはよいよ始まる大河ドラマ「西郷どん」を題材にした句である。郷土の英雄のドラマだけに県民の関心の高さがうかがわれた。その分同想・類想句が多く、もっと違った角度で詠んでほしかった。また子や孫の誕生を詠んだ句でも似たような表現が見られ、共倒れになった句もあった。課題吟の場合、その課題に合わせた小さなドラマを自分なりに作ってみてもいい。どういうドラマを描いていくか、それが作句の楽しみでもある。目に見える17音字以外の空間を讀者に感じさせることで句は広がっていく。作者と読者のこの空間の共有こそ川柳の醍醐味と言えるだろう。

一席。まだ幼いと思っていた子がいつ

空間の共有こそ醍醐味

のまにか夢を語るようになる。少しずつ成長していく姿を頼もしそうに見守る父と母。夢は日ごとに膨らみ、瞳はきらきらと輝きを増す。そして今、夢に向かつて少年を乗せた汽車はゆっくりと動き始める。

二席。お互いが自己主張や正当性をいくら繰り返しても解決には程遠い。それは個々の人間の間でも国同士でも根幹は同じだ。解決の糸口は小さな行為から始まる。それを作者は握手に見つけた。言いはあっても一步前進させようと差し出した手。求めに応じて相手が握り返してくれたら、解決はもう近い。

三席。最近、挙式後に新郎新婦と出席者が大空に向かって風船を飛ばすという演出がある。手から離れたカラフルな風船は大空を舞い、まさに今夫婦となった二人の新しい出発を祝う。思わずこんなシーンを思い浮かべる句である。

日置 入来院元彦

薩摩川内 石神 紅雀

鹿児島 脇 知子